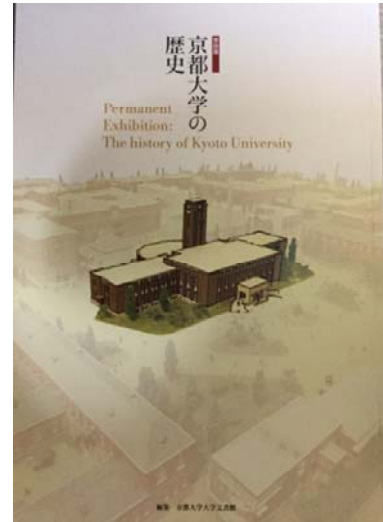


## 「京大の歴史」を見る

2003年12月、80年近くにわたって京大のシンボルとして親しまれ続けた本部本館（通称時計台）が、百周年記念事業の一環として大規模な改修工事により、「百周年時計台記念館」として生まれ変わった。

記念館1階にある「歴史展示室」に入ると、常設展「京都大学の歴史」を展示してあり、じっくりと見て回った。歩き疲れていたのも、映像ブースで休憩を兼ね「京都大学の百年」を見た。やはり映像は「えいゾー」であり、疲れもすこしとれた。

写真上は常設展の内容をビジュアルにまとめた冊子である。1897(明治30)年、日本で2番目の大学として、京都帝国大学が創立された。初代総長の木下広次は、最初の入学宣誓式において「当大学は東京帝国大学の支校にあらず又小模型にもあらず」と述べ、京大が「独自の資性」をもつ必要を強調した。



ユニークな教育システムは、法科大学（のちの法学部）に最も顕著にみられた。当時詰め込み式との批判のあった東大とは異なり、学生と教員の相互啓発を重視したゼミナール制の導入や、卒業論文の必修化を行い、また一方では科目選択の自由度を広げて学生の自発心や独創力の養成をめざした。立花隆『天皇と東大』を読んだことがある。「日本近現代史の最大の役者は天皇であり、その中心舞台は東大だった」とあり、京大との比較は興味深いものがあった。

写真下は「歴史展示室」となりの大学文書館企画展のチラシである。「京大経済学部の創設と河上肇たち」が開催されていた。「第1次世界大戦終結からまもない1919年に京都大学経済学部は創設されました。本企画展では、創設から1920年代末までの経済学部の激動の軌跡を、同時代の教官や学生たちに光を当てながら描き出します」とある。主要展示品には「経済学部独立に関する件」「宣誓書」「河上肇 蓮の花」「河上教授辞職に関する件」などがある。



島恭彦先生の「暗い谷間より明るい丘へー京大経済学部30周年に憶う」(『戦後民主主義の検証』)を読んで、軍国主義時代の京大経済学部に興味をもった。「研究者としての私の歴史には『暗い過去』のみがある。私が昭和6年大学に入学したその年の秋、満州事変の勃発を告げる号外のあわただしい鈴の音を聞いた」と書かれている。

(2014年12月24日)